

氏 名	WANG SHICHEN (オウ シシン)
学 位 の 種 類	博士 (造形)
学 位 記 番 号	博第 51 号
学 位 授 与 日	2025 年 3 月 14 日
学位授与の要件	学位規則第 3 条第 1 項第 3 号該当
論 文 題 目	個人的な記憶に関わる絵画的表現 —他作家への考察、オートマティックな実践および自作をめぐる—
審 査 委 員	主査 武蔵野美術大学 教授 吉川 民仁 副査 武蔵野美術大学 教授 春原 史寛 副査 武蔵野美術大学 教授 赤塚 祐二 副査 川崎市岡本太郎美術館 館長 土方 明司

内 容 の 要 旨

本研究では個人の記憶というモチーフをめぐる、絵画を基軸にした自作の表現との関連を明らかにする。また美術制作者の視野から出発し、自作の分析を通して「オートマティスム」に関わる実践の実例を提示するのである。

日進月歩の科学技術がリアルとバーチャルの境界を曖昧にし続け、外的な記憶装置が進化し続けている。外的な記憶装置が静的で不変であるのに対し、人間の内的な記憶は時間の経過とともに変化する。現在の作家たちは絵画で過去を記録するだけでなく、絵画を通して人間の内的な記憶の特質を探究し、またそれを利用して創造を行う。

本研究に関わる「記憶」のあり方を歴史的に考察・説明した上で、自作の制作方法も分析している。まずインスピレーションを得た他作家の作品を考察し、他作家が個人の記憶にまつわって創造を行う方法と、それが私自身の制作手法に与えた影響を論じている。次に、シュルレアリスム運動から広がった「オートマティスム」の制作方法と関わりながら、記憶の連続想起と即時的な体験に依拠して、どのようにダイナミックに絵画制作を進めるかを示し、これにより自作の中に自身の記憶をどのように捉え、表現することを明らかにした。

本研究において「オートマティスム」に注目する理由はその特質である。オートマティスムは固定不変な単一の方法ではなく、理性からの制御を離れた人間のダイナミックな内的動きの特質に関わり、他の制作方法と柔軟に組み合わせることができる開放的な制作状態・方法である。そしてダイナミックな内的動きには、制作プロセスにおける過去の無意識的な想起も含まれる。このような制作状態・方法では、あらかじめ絵画の全体的な構図や表現対象を設定せず、画面の一部から出発し、制作プロセスに沿って徐々に制作を進め

ていく。一方で、シュルレアリスム運動から広がったオートマティスムは歴史の中で変遷をたどりながら、オートマティスムのどのような特質を興味深いと考えて制作の中に取り入れるのかということは、後の制作者の需要によって異なるのである。これにより、自作において色彩、画面構成、素材などの多方面において多様な絵画表現がもたらされる。

そして本論の中に「オートマティックな実践」という語を論じた。私はその「オートマティックな実践」を、「オートマティスム」の側面に関わる制作実践だと定義する。具体的には、「オートマティックな実践」は自作の制作プロセスにおいて、「オートマティスム」に関わる連続する内的な想起や他の制作方法を組み合わせた実践という意味である。したがって、自作の制作プロセスの中には過去の想起や銘記をも伴っており、創造と記念は並行している。

本研究の構成は以下になっている。

第一章では、「記憶のあり方」、「制作の中に個人の記憶をこだわる理由」、「記憶と絵画の関係」といった方面を通して歴史的に考察・説明し、本研究において自作に関わる「記憶」の位置付けを明らかにしている。

第二章では、記憶に関わる他作家の作品の特質などからインスピレーションを受け、またそれらが私の作品の中にどのように表現されているかについて論じる。そして作品の考察で私の作品に具現化されている二つの特質を分析・説明する。特質の一つは、作品が観者に提示する視覚的な「曖昧さ」と「粗雑さ」である。もう一つは、作品の中で観者に提示されるイメージについてであり、つまり直接的な人間像ではなく主に日常品である。

第三章では、シュルレアリスム運動から広がった「オートマティスム」を用いた絵画に示された「イメージ同士の不合理性」と、自作における制作プロセスとの関係を考察する。そして「オートマティスム」はシュルレアリスム運動にとどまらず、伝播の中に作者の需要に応じて部分的に自身の制作の中に取り込まれているということを論じている。

第四章では、前章の「オートマティスム」への考察を踏まえつつ、作者の記憶とのつながりやその表現方法についてさらに分析する。作品分析を通して、オートマティスムの実践において、作者自身の記憶や感情が他の事物の変容を通して表現したことがあると考えられる。

第五章では、各前章の考察と分析を踏まえて自作とその制作プロセスをめぐって、自分の記憶とどのように関わり、どのように表現しているのかについて説明した。

第六章では、本研究の各章における考察と分析から得られた成果を振り返り、それらを整理し、本研究の記憶と絵画制作との結び付きを記述した。それに基づいて記憶の連続想起以外に、自作における造形的な表現の試みに焦点を当てて説明している。

最終章では、本研究全体を通して得られた成果を要約し、研究の目的に対する結果を記述した。

審 査 結 果 の 要 旨

1. 公聴会及び審査委員会の経緯報告

2025 年 2 月 18 日、午後 13 時 30 分より 2 号館 FAL にて、王詩晨の博士論文『個人的な記憶に関わる絵画的表現—他作家への考察、オートマティックな実践および自作をめぐって』の博士論文公聴会を行なった。参加者は発表者も含め全員で 19 名であった。公聴会の開催趣旨を運営委員の北澤洋子教授よりご説明いただき、主査吉川の進行のもと、発表者本人よりパワーポイントを使用して論文概要の説明が行われた。プレゼンテーションは開始より 14 時 25 分まで行われた。次に質疑応答が開始され 15 時 05 分頃まで行われた。参加者からは色彩の選択、作品の大小における細部のディテールの違い、現代におけるオートマティックな手法の有効性について、制作プロセスに対すること、制作に言葉がどの程度介入しているのか、制作の軸や制作に対してのディレクションがどうあるのか、作品タイトルの意味性などの多数の質問があり、これらについての意見交換が行われた。その後、1 号館小会議室に場所を移して審査委員会を開催し、申請者本人に対する質疑を行い本文中の語彙や言葉の問題についての確認が 15 時 25 分まで行われた。申請者退室後、改めて本論文に対して審査が行われ、15 時 55 分に博士学位申請論文に対する審査委員会を終了した。

2. 審査委員会構成員一名の欠席報告

当審査委員会の構成員である土方明司氏が健康上の理由で当日の審査委員会に参加が叶わない旨の連絡を 1 月 23 日受ける。その後、博士課程運営委員会の三代委員長、教務チームに相談した。検討いただいた結果、今回はやむを得ない事情の申し出であるので、事前に博士論文の審査と講評を受けることを条件とし、当日の審査委員会で総合的に判断することの指示を受ける。土方氏からは事前に博士本論文の審査結果と短評を郵送とメールにて受け取り、当審査委員会を開催したことを申し添える。

3. 論文構成及び概要

論文の構造としては主に 1 章から 6 章となる。「はじまり」から本研究の構成を説明しており、各章・各節に論が展開され「終章」で結びとしている。王が着目している点は、自身の制作が記憶を誘発するモチーフ（物に付随した過去の記憶）にあることに気付いたことにある。本人が述べているように個人の具体的な記憶を創造の要素として作品を制作する過程は、作品の間に「対話」が常に存在していると考えており、この「対話」が、個人的な記憶を表現する場面から、未知なる世界の創造へと絶えず導くものであると考えたことである。第 1 章では「記憶」の一般的な定義から、科学分野における「記憶」の研究内容と方向性が美術における「記憶」との違いを考察している。また歴史における「記憶」を考察しながら、自作における「記憶」が創造の元にあることが言及されている。第 2 章

では記憶に関わる3名の現代作家の作品分析が考察され、自作において強くインスピレーションを受けた影響がどのような表現となっているかを考察している。自身の作品の特質を視覚的な「曖昧さ」と「粗雑さ」と述べ、記憶の特質である朦朧としたイメージの類似点をあげている。また、人間の存在を「無人の光景」の中にある主に日常品から感じられるものと考え、作品と観者に接点生まれ、視覚的で感情的な共鳴に繋がるとしている。第3章では「オートマティスム」を用いた絵画に示された「イメージ同士の不合理性」と自身の制作プロセスとの関係を考察し、文献を通して「オートマティスム」の定義と概念を説明している。更に「オートマティスム」を用いたシュルレアリストたちの作品分析を通し自身の制作プロセスと通底する二つの点を挙げている。一つは制作の前提としての構図構成が綿密になく、論理的な思考からも切り離された作者の内的な喚起に従い制作があること。もう一つは画面の中に多くのイメージが現れる「不合理性」は多様な要素が大胆に引き寄せられたことの結果だとしている。そして、「オートマティスム」はシュルレアリスム運動にだけあるのではなく、現在にも伝播しており、必要とする者に応じた需要があり取り込まれているとしている。第4章では「オートマティスム」への考察を踏まえて記憶とのつながりと表現方法が分析され、作者自身の記憶や感情が他の事物の変容を通して表現がなされ、このプロセスこそ作者の内的な現実の視覚化とみることができ、日常生活の中で実感する過去の無意識的な想起はオートマティスムの実践との親和性を指摘している。第5章ではこれまでの各章における考察と分析を踏まえながら自作における制作プロセスと自身の記憶がどう関わり、どのように表現しているかを説明し、自身の制作において特徴的である木炭使用についての表現方法について作品ごとに説明を加え論じている。第6章では各章における考察と分析から得られたことを整理して本研究である記憶に関わる絵画制作の結びつきを記述し、自作における造形的な表現の試みに焦点を当て説明している。最終章では本研究全体を通して得た成果を要約し、研究の目的に対する結果を論じている。

審査結果の報告

審査委員会では、直前に行われた公聴会の内容や質疑応答の意見なども参考にしながら審議が行われた。まず、予備論文のサブタイトルで『—他作家への考察、「オートマティスム的」な実践および自作をめぐって—』としていたところを『～オートマテックな実践～』と修正したことの評価があった。しかしながら、第一章のはじめより「記憶」に関しての科学的な解釈や分析など、歴史的な考察がされ、本研究における位置付けがされているものの、やや学術的な敷居の高さが目立っているため、同章の終わりの方にある自身の中にある最初の絵のくだりの話から論文が始まる方が論文の構成としては、自然となり良かったのではとの意見があった。第二章では自作における他作家からの影響が論じられ、自作に特徴的だとする「曖昧さ」や「粗雑さ」に関してはより深い考察があれば良かったとの意見。「曖昧さ」や「粗雑さ」が指し示していること自体が申請者の描いているイメージ

のことなのか、それとも表現方法のことなのか少し分りにくく、日本語の細かいニュアンスを含む意味を精査し、論じる対象においては用語や言葉を適切に選択できればより良い論文になったのではとの意見があった。第三章においては「オートマティスム」の具象的な傾向の考察があるものの抽象表現主義を代表するロバート・マザーウェルのシュルレアリスム＝オートマティスムの影響の言及があるのみになっている。歴史的には絵画の大きな分岐点にもなっているし、現代美術につながるものでより深く考察が欲しかった。ただ、申請者自身が最も影響を受けている画家としてフランシス・ベーコンを上げ、制作プロセスを考察し、内的な流れに従って画面を展開させることが申請者にとって深い親和性が見出し共感する姿勢は強く窺えた。第四章の無意識的想起を「騒音」としている根拠が物足りない。もしかすると「騒音」という言葉ではない、別に相応しい語彙や用語があったのかもしれないことの指摘があった。第五章については自作の解説に関することで興味深い、また、作品事例の数も多く申請者の特徴でもある木炭を用いて制作することによる独自性や個性的な側面がよく窺える内容であった。この章に述べられた自身の作品分析も含め絵画における新たな取り組みから絵画の可能性への言及がされることで、更なる論の拡張になったのではとの指摘があった。終章及び全体については人間像を描かずに日常品のイメージを用いることは、人間の存在を意識させる手法への考察は納得できた。全体的には自作を起点とし、シュルレアリスム、オートマティスムの造形思考を援用した考察が深められている点が評価された。今後の制作にあたっては自らが考察し深めた内容を軸とし、絵画性、独自性を持ちながら自律性を失わないように制作研究を心がけて欲しいことが要望された。博士本論文としては部分的な語彙や誤字を修正をすることで、概ね良しとし審査委員の全員一致で合格とした。

〈目次〉

はじめに

本研究の構成

第一章 記憶と絵画について

1.1 記憶について

1.2 個人の記憶を制作のモチーフとしたきっかけ

1.3 記憶と絵画についての私見

まとめ

第二章 他作家への考察と、記憶に関わる自作の表現方法

2.1 他作家の「記憶」に対する考察

ボルタンスキーの作品における「記憶」

シリーズ《復元の試み》

シリーズ《目録》

シリーズ《サイネーテ・コミック》

ドリス・サルチュードの《Atrabiliarios》

サイ・トゥオンブリーの「船」と「海」

2.2 忘却の視覚化である「曖昧さ」や「粗雑さ」

2.3 日常品と「無人の光景」

まとめ

第三章 作品における視覚的な「不合理性」

3.1 「オートマティスム」とは

3.2 マックス・エルンストのコラージュと《Celebes》（セレベスの象）

3.3 ジョアン・ミロの《Painting》（1927）

3.4 シュルレアリスムにとどまらない「オートマティスム」

まとめ

第四章 内面的な現実の視覚化

4.1 内面的な現実の視覚化とは

4.2.1 エルンストの《ナイチンゲールに脅かされる二人の子供》

4.2.2 エルンストの《The Birds Cannot Disappear》

4.3 日常の「騒音」

まとめ

第五章 自作の解説

大学院前期

《Around Around Around》について

《Don't Cry My Sister》について

絵画における影と木炭

《転眼消失在雲》について

絵画に対する私の選択

大学院後期

シリーズ《破片》について

《恐怖、近づけない》について

《What I See is What I Saw》について

《自作自演》について

《内と外-繁殖関係》について

《神秘的な光》について

《私のように突き刺す / 洪水らしい衝突》について

《どこでもドア》について

《意外来臨》について

自作におけるモンタージュ的な表現

《Untitled》について

まとめ

第六章 絵画と記憶との結び付き、および表現の試み

6.1 本研究における絵画と記憶との結び付き

6.2 少し違いのある試み

《ストーリー数独》

《X》について

《夜に出発しなきゃ》

《私の解放橋》

《一進一出》について

《辿り》について

まとめ

終章

参考文献

和語文献

中国語文献

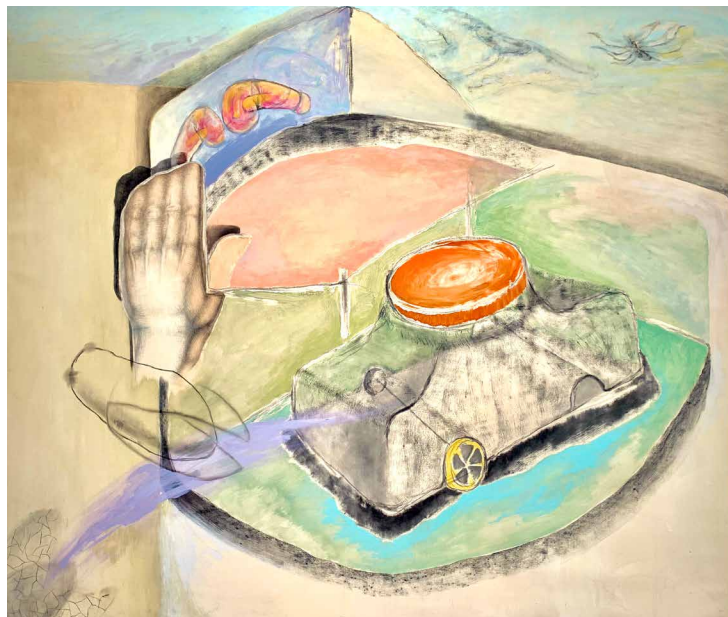
洋語文献

ウェブサイト記事

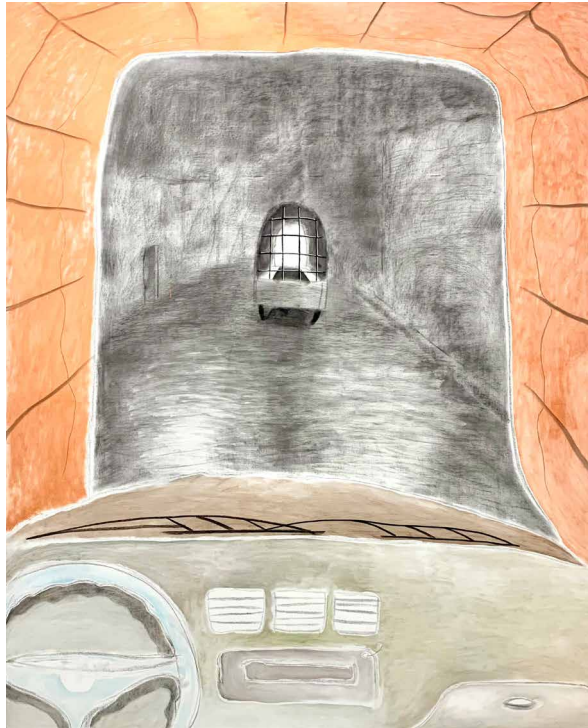
図版出典



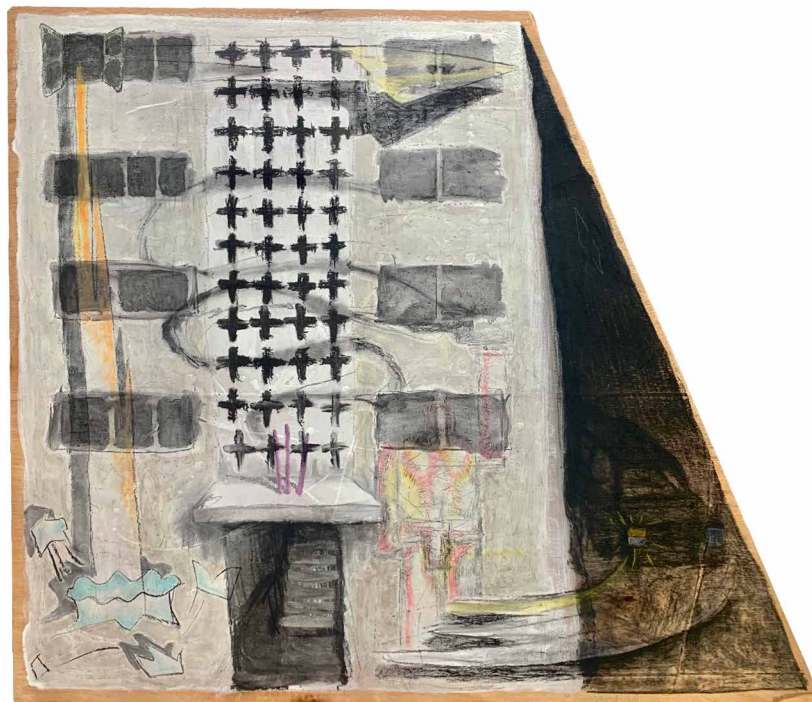
「around around around」、H 1800 mm x W 1350 mm 、キャンパス / アクリル / 油彩 / 木炭、2021



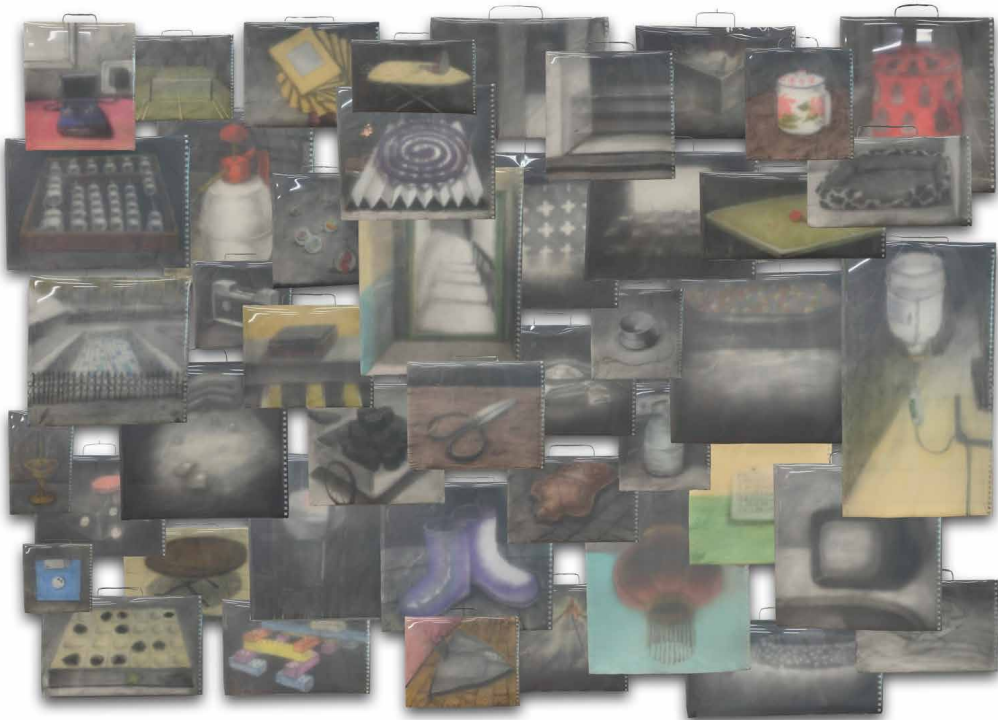
「瞬眼消散在雲」、H 1700 mm x W 1990 mm 、キャンパス / アクリル / 木炭 / 油彩、2021



「裏と外」、H 1820 mm x W 1500 mm、キャンバス / 油彩 / 木炭 / マーカーペン、2023



「夜に出发しなきゃ」、H 920 mm x W 1070 mm、パネル / アクリル / 油彩 / 木炭 / パステル、2024



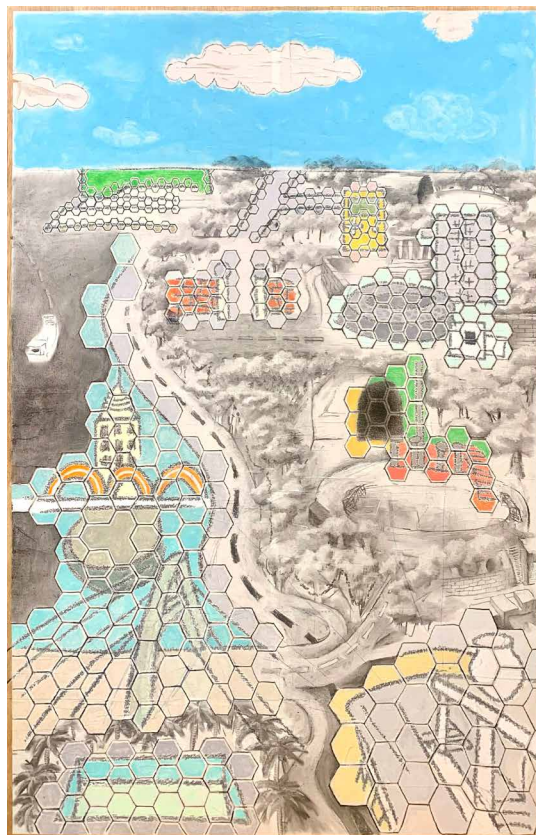
「破片」(一部)、サイズ不定、画用紙 / マットフィルム / 木炭 / パステル / 鉛筆 / 針金 / ボールペン等、2021 から現在までに 200 枚以上



「未知来臨」、H 1950 mm x W 1500 mm、キャンバス / 木炭 / 油彩 / 鉛筆、2023



「X」、H 1430 mm x W 920 mm 、パネル / 油彩 / 木炭 / パステル、2024



「通り」、H 1430 mm x W 920 mm 、パネル / 画用紙 / 木工用ボンド / 油彩 / 木炭、2024



「一進一出」、H 920 mm x W 1140 mm、パネル / アクリル / 木工用ボンド / 油彩 / 木炭 / 修正テープ、2024



「螺旋状」、H 650 mm x W 910 mm、パネル / 木工用ボンド / 油彩 / 木炭、2024